

平成30年度（第53回）全剣連剣道中央講習会（東日本） 伝達講習会資料〔日本剣道形〕

第1 講義

1 日本剣道形制定の経緯

日本剣道形は、明治44年7月中等学校令施行規則が一部改正され剣道が柔道と共に中等学校の正科として採用されることになった。大日本武徳会、文部省、高等師範学校の三者が協議し、明治44年12月剣道形制定の調査委員会を設立した。

主査として根岸新五郎、門奈正、辻真平、内藤高治、高野佐三郎、5氏に委任し草案を作成。更に全国を11区分し20名の調査委員を招聘し、鋭意調査研究の結果、大正元年10月16日大日本帝国剣道形が制定された。指導上の統一を図ることを目的に、いずれの流派にも属さない各流派統合の象徴として制定されたものである。

大正6年9月、所作に関する細部の解釈の違いから不統一が顕著となったため、「加註」が施された。

昭和8年5月、剣道形の更なる普及発展と細部の所作に対する詳解の必要性から「増補加註」及び写真説明「高野佐三郎（打太刀）小川金之助（仕太刀）」がなされ統一の徹底が図られた。

昭和56年12月7日「日本剣道形解説書」制定

平成24年4月1日 剣道講習会資料

2 意義

日本剣道形は、長い歴史を持ち、理合い・精神面に深い内容を持つまでに発達してきた伝統文化である。この伝統文化である、剣道形を正しく継承し、次代に伝えることは大きな意義がある。

3 剣道形修錬の目的

剣道形の修錬を通じて、剣道の原点である「剣の理法」を学び、剣道の正しい普及発展に役立てることが目的である。高野佐三郎先生著「剣道」の中では次のように教えている。『斯道の練習法に三様あり、第一・形の練習、第二・仕合、第三・打ち込み稽古、是れなり』 剣道形の重要性を説いている。

4 重点事項

剣道講習会資料「日本剣道形講習における〔重点事項〕」参照

5 「日本剣道形」修錬における基本的な留意点

日本剣道形解説書、講習会資料「日本剣道形」参照

6 共通理解

- (1) 中段の構えの延長は、棟の鰐元と切っ先を直線で結んだ延長をいう。
- (2) 太刀一本目、打太刀正面打ちを抜かれた剣先の高さは下段程度。
- (3) 太刀四本目、双方切り結ぶ位置は、およそ刀の中央部、剣先は、正面の高さ。
- (4) 太刀五本目、仕太刀の中段の構えは、一拳前に出し刃先はやや斜め下。
- (5) 太刀六本目、仕太刀がすり上げ小手を打ったとき、右足を踏み出し左足を引き付けるを原則とするが、間合いによって、引き付けなくても、踏む出したと解釈する。
- (6) 太刀七本目、仕太刀がすれ違いながら胴を打つときの方法。
 - ① 右足を右前にひらいたとき、刀を左肩上に振り上げ左足を踏み出すと同時に胴を打つ。
 - ② 右足を開いても（体は移動させない）刀を振り上げず、左足を踏み出すと同時に振り上げ振り下ろす一拍子で打つ方法。（修錬者の練度に応じて指導する）
- (7) 小太刀半身の構えの刃先の方向
 - ① 中段半身の構えは、刃先をやや斜め下に向ける。
 - ② 下段半身の構えの刃先は、真下とする。

7 まとめ

- 1) 日本剣道形解説書、講習会資料（日本剣道形）を熟読・精通する。
- 2) 日本剣道形の修錬を通じて、剣道の原点である剣の理法を学び、剣道の正しい普及発展に役立てることが目的である。
- 3) 我が国の伝統文化として次代に正しく継承しなければならない。その為に平素か日本剣道形の修錬に努める必要がある。

第2 日本剣道形立合前後の作法

1 入場

下座から入場、打太刀右側、仕太刀左側の位置し演武場に一礼の後、仕太刀は打太刀に従って座礼の位置に進む。

2 歩き方

右手に太刀（小太刀）を持ち、左手は体側よりやや内側（前）におき、振らないようにしてすり足で姿勢を正しく前方を注視して厳かに進む。特に、太刀を持った手は振らないように注意する。剣道形における足捌きは、すべてすり足である。

3 太刀・小太刀の携行時の持ち方

右手の親指と人差し指で小太刀を持ち、人差し指と右手の残り三指で太刀を持つ。二刀は、刃を上にして平行に持つようにする。

4 座礼の位置

特に限定しないが、下座中央が望ましい。双方約三步の距離で向かい合って正座する。

5 座り方、立ち方

袴の裾捌きはしないで、左の足から座り、右足から立つ左座右起の礼法に従う。座るときや立つときは必ず爪先立てて踵の上に尻を置いて立ち、また座る跪居の姿勢をとる。

6 座礼の仕方

相手の注目し、上体を前方に傾けつつ両手を同時に床につけ、頭を静かに下げる。上体を前傾させる時、臀部をあげたり、襟がすかぬよう、顎がようにする。

7 立会の間合への移動要領と小太刀の置き方

- (1) 打太刀は、立会の間合（およそ9歩）に自然歩行で進み、仕太刀を待つ。
- (2) 仕太刀は、立会の位置から右（左）後方約5歩のところに下座側の膝をつき、小太刀の刃部を内側に演武者と平行に置く。

8 立礼の仕方

- (1) 双方立会の間合に進んだ後、揃って上座に向かって上体を約30度前に傾け礼を行う。
- (2) お互いに向き合い、上体を約15度前に傾け注目して礼を行う。目礼である。

9 帯刀の仕方

- (1) 刀の場合は、鐙が臍の前に来るように差し込む。木刀の場合は、柄頭が正中線になるように腰にとる。
- (2) 親指を鐙にかける動作は、
 - ・鯉口を切ること
 - ・刀を相手から抜かれないようにすること
 - ・鞘走りを防ぐことのためである。